

考古学と民俗学

——協業のための予備的考察——

福 田 アジオ

-
- | | |
|------------------|-------------------|
| 1. 歴史学と考古学、民俗学 | 4. 考古学研究者の民俗学理解 |
| 2. 柳田國男の考古学批判と期待 | 5. 考古学と民俗学の協業に向けて |
| 3. 民俗学研究者の考古学理解 | |
-

論文要旨

考古学と民俗学は歴史研究の方法として登場してきた。そのため、歴史研究の中心に位置してきたいわゆる文献史学との関係で絶えず自己の存在を考えてきた。したがって、歴史学、考古学、民俗学の三者は歴史研究の方法として対等な存在であることが原理的には主張され、また文献史学との関係が論じられても、考古学と民俗学の相互の関係については必ずしも明確に議論されることがなかった。考古学と民俗学は近い関係にあるかのような印象を与えていたが、その具体的な関係は必ずしも明らかではない。本稿は、一般的に主張されることが多い考古学と民俗学の協業関係の形成を目指して、両者の間についてどのように従来は考えられ、主張してきたのかを整理して、その問題点を提示しようとするものである。

柳田國男は民俗学と考古学の関係について大きな期待を抱いていた。しかし、その前提として考古学の問題点を指摘することに厳しかった。考古学の弱点あるいは欠点を指摘し、それを補って新しい研究を開拓するのが民俗学であるという論法であった。したがって、柳田の主張は考古学の内容に踏み込んだものであり、彼以降の民俗学研究者の見解が表面的な対等性を言うのに比較して注目される点である。多くの民俗学研究者は、考古学と民俗学の対等な存在を言うばかりで、具体的な協業関係形成の試みはしてこなかった。その点で、柳田を除けば、民俗学研究者は考古学に対して冷淡であったと言える。それに対して、考古学研究者ははやくから考古学の研究にとって民俗学あるいは民俗資料が役に立つことを主張してきた。具体的な研究に裏付けられた民俗学との協業や民俗資料の利用の提言も少なくない。しかし、それは考古学が民俗学や民俗資料を参照することであり、考古学の内容を豊かにするための方策であった。その点で、両者の眞の協業は、二つの学問を前提にしつつも、互いに参照する関係ではなく、二つの学問とは異なる第三の方法を形成しなければならない。